

2008.08.05

JWRC

「サンゴ礁域」と「サンゴ群集域」の考え方について
岩瀬委員からのコメント

1. 「サンゴ群集域」の名称について

● 「サンゴ群集域」という名称について

「サンゴ礁」にも当然「サンゴ群集」があるので、「サンゴ群集域」という語はおかしい。高緯度であることを明記して、「高緯度サンゴ群集域」あるいは「高緯度サンゴ分布域」としてはどうか。

2. サンゴ礁域とサンゴ群集域の比較について

● 表の漁業資源利用 サンゴ礁域 で、「地域住民主体に消費されており」について、離島では漁民ではない島民による利用もあるが、産物は市場に流通しており、この文言は必要ないのではないかと。

3. 行動計画におけるサンゴ礁域とサンゴ群集域の考え方（案）について

● <サンゴ群集域>の記述について

非サンゴ礁域でサンゴの保全に関わっている人が直面している最も大きな困難は、サンゴ群集を保全することがどんな「価値」の保全につながるのかをうまく説明できないこと。環境の指標なら、必ずしもサンゴに求める必要はない。おそらく非サンゴ礁域の県関係者は、このような内容で行われる行動計画には価値を見いだせないだろう。

● サンゴ群集域におけるサンゴへの認識

高緯度サンゴ分布域におけるサンゴ群集は藻場生態系を構成する一要素であるとする前提には無理があると思う。多くの場合、藻場の中に少しずつサンゴが増えてきて、いつの間にかサンゴ場に変化していく訳ではなく、まず藻場が消滅または縮小し、磯焼け状態になった海域にサンゴ群集が発達するか、藻場の中にぽつぽつとサンゴがあったのが、磯焼けになってサンゴが増加している。当然水産サイドは藻場の復元を考えるわけで、そうすると現在分布しているサンゴ群集は邪魔者でしかない。漁民の中にはサンゴが海藻を駆逐したと考えている人もいる。単に操業の邪魔になるという程度ではなく、サンゴがいるから海藻が生えないという論に対抗できるしっかりした理論がないと、例えばサンゴを刈り払って藻場造成をしようというような乱暴な計画がもちあがっても、計画を阻止できない。

● 「サンゴ群集域」での「サンゴ群集」の役割について岩瀬委員が用いている説明

（科学的なデータ等の裏付けがあるわけではないが、経験的なひとつの考え方として）

（1）（四国沿岸では）高水温により藻場が消滅して磯焼け状態の海域が多数発生している。そのような場所の多くにサンゴが増殖し、現在ではかつてないほどにサンゴの群生地が広がっている。上昇してしまった現在の海水温が海藻の生育にとって阻害要因となり、同じ高水温がサンゴにとって好適要因になっているのであって、海藻とサンゴが競争した結果サンゴが勝ったというわけではないと考えられる。

(2) そのような場所に生育しているサンゴを取り去っても、阻害要因である高水温はなくならないので、藻場の再生を行うことはできない。

(3) 浅海域では海藻・サンゴは一次生産者として生態系の基礎を構成しており、藻場が消滅した海域からサンゴも取り去れば生態系は栄養循環の基盤を失い、沿岸生態系存続の危機を迎えることになる。例えば高知県で既に利用されているマガキガイやシラヒゲウニなどは亜熱帯域でも重要な漁獲物であり、藻場がサンゴ群生地になっても高い生産性を維持できる漁獲物もある。さらに、サンゴ群生地は必ずしも漁業に役立たなくても、生物多様性保全の観点から保全する価値がある。

その他コメント (宝石サンゴについて)

宝石サンゴについては、近年ワシントン条約のリストに載せようという動きがあるため、高知県や水産庁は対応に追われているようだが、生息域が全く異なるのでここで問題にする必要はないだろう。